

| | |
|--------------|---|
| Title | 事業開発及びマネジメントシステムに関する研究 : 人文・社会学系の産学連携事業における教育・医療支援システムの開発と実証への取り組みを中心として |
| Author(s) | 福重, 八恵 |
| Citation | 大阪大学, 2009, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/54289 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文審査の結果の要旨

| | |
|------------|---|
| 氏名 | 福重八恵 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（経済学） |
| 学位記番号 | 第 23262 号 |
| 学位授与年月日 | 平成21年4月16日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済学専攻 |
| 学位論文名 | 事業開発及びマネジメントシステムに関する研究—人文・社会学系の産学連携事業における教育・医療支援システムの開発と実証への取り組みを中心として— |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 浅田 孝幸 (副査) 教授 金井 一頼 准教授 松村 真宏 |

論文内容の要旨

平成13年の「大学発ベンチャー1000社計画」発表以降、活発な産学連携活動が展開され、多くの大学発ベンチャーが設立されたが、人文・社会学系の産学連携や大学発ベンチャーの起業は極めて少数にとどまる。本研究では、著者が約5年にわたって取り組んできた産学連携事業に関するアクションリサーチの結果を中心に整理し、その分析と考察を通して、人文・社会学系における産学連携事業の成功要因と課題を明らかにする。まず2章では、アクションリサーチの分析・考察のポイントとなる、産学連携の類型、産学連携におけるコンフリクトとコーディネート、中小企業及び大学発ベンチャーを想定した産学連携ビジネスの成功要因、「場」のマネジメントと産学連携、産学連携の定義と中小企業や大学発ベンチャーによる産学連携の課題等について、先行研究のレビューを行う。3章では、産学連携事業に取り組んだ背景や中小企業選択の動機、産学連携の崩壊と再構築など、産学マッチング活動を整理し、その分析を通して、産学連携におけるコンフリクト問題とコーディネートのあり方、中小企業及び社文系研究室による産学連携の特徴について考察する。4章では、システムの実用化と知財開発の2つの面からベンチャーの成果を具体的に紹介する。また、システムの利用領域拡大に関する応用研究へのベンチャーの貢献について述べる。5章では、ベンチャーによる営業成果と財務諸表から経営の行き詰まりを示すとともに、これを打破すべく実施した基幹事業の見直しと経営体制の変革について説明する。その上で、体制変革後のベンチャーによる営業成果と財務諸表からビジネスとしての失敗を示し、その要因について考察する。6章では、システムに関する2つの応用研究について述べる。まず、モバイルによる弊害の克服という観点から実証研究を整理し、そこで模索したモバイルと「手書き」の融合が、システムの利用領域を拡大するために必要となることを述べる。次に、システムの利用領域を拡大すべく取り組んだ、医療分野においてモバイルシステムの適用可能性を模索する研究について述べる。7章では、前章までに整理した産学連携事業の成功と失敗の両面について、「場」のマネジメントの観点から分析し考察する。8章では、産学連携事業についてマッチングの観点からまとめた上で、本研究の理論的含意と実践的含意を提示する。最後に今後の研究課題について整理する。

【論文内容の要旨】

平成13年の「大学発ベンチャー1000社計画」発表以降、活発な産学連携活動が展開され、多くの大学発ベンチャーが設立されたが、人文・社会学系の産学連携や大学発ベンチャーの起業は極めて少数にとどまる。本研究では、著者が約5年にわたって取り組んできた産学連携に関するアクションリサーチの結果を中心に整理し、その分析と考察を通して、人文・社会学系における産学連携事業の成功要因と課題を明らかにする。まず、第2章では、アクションリサーチの分析・考察のポイントとなる。産学連携の類型、産学連携におけるコンフリクトとコーディネート、中小企業及び大学発ベンチャーを想定した産学連携ビジネスの成功要因、「場」のマネジメントと産学連携、産学連携の再検討と中小企業や大学発ベンチャーによる産学連携の課題等について、先行研究のレビューを行う。第3章では、実践的に産学連携事業に取り組んだ背景や中小企業選択の動機、産学連携の崩壊と再構築など、産学のマッチング活動を整理し、その分析を通して産学連携におけるコンフリクト問題とコーディネートのあり方、中小企業及び人文・社会学系研究室による産学連携の特徴をそれ以外の事例と比較を交えながら考察する。第4章では、事業シーズとしてのソフトウェアプログラム（以下ではシステム呼称する）の開発過程と実用化過程、それに関連した知財開発の2つの面からベンチャーの具体的な成果を紹介する。また、システムの利用範囲拡大に関する応用研究へのベンチャーの貢献について述べる。第5章では、生成から死滅までの流れを俯瞰して、ベンチャーによる営業成果と財務諸表から経営の行き詰まりと、それを打破すべく実施した基幹事業の見直しと経営体制の変革について説明する。その上で、体制変革後のベンチャーの状況と、その後の行き詰まりとしてのビジネスの失敗の要因を考察する。第6章では、ベンチャー事業で開発したシステムについての2つの応用研究について述べる。第7章では、前章までに整理した産学連携事業の成功と失敗の両面について、「場」のマネジメントの観点から分析し、考察を加える。第8章では、産学連携事業についてマッチングの観点からまとめた上で、本研究の理論的含意と実践的含意を提示する。最後に今後の研究課題について整理する。

【審査結果の要旨】

本論文の主要な貢献は2つある。1つは、具体的なシーズ開発から事業化までの一連の起業家活動について、自らアクションリサーチを行い、そのなかで、産学連携の成功・失敗の要因として、行動学的な研究成果であるコンフリクト・マネジメントの関する類型の検討とその理論的な応用研究を具体的な事例を通じて行ったことである。2つめは、「場」のマネジメントとして多くの研究者に取り上げる日本型のコーディネートの方法論について、産学連携のマッチングにおいてどのような意義と問題点があるのか、具体的な事例から説明したことである。得られた結果は、大学発ベンチャーの実践的な経営を考える上で、いわゆる「死の谷」を越えるための方法論について説得ある事例とその理論化を試みた点が高く評価される。得られた結果は、全体として見たときに、これまでにない課題解決視点を提供しており、その知見は有用である。もっとも、人文・社会学系ベンチャーに固有の課題についての説明などには、なお明確にすべき課題があり、論理構成の一部には、限界や課題もっている。しかし、その得られた内容から見て、十分に、本論文は、博士（経済学）の学位に値すると判断する。